

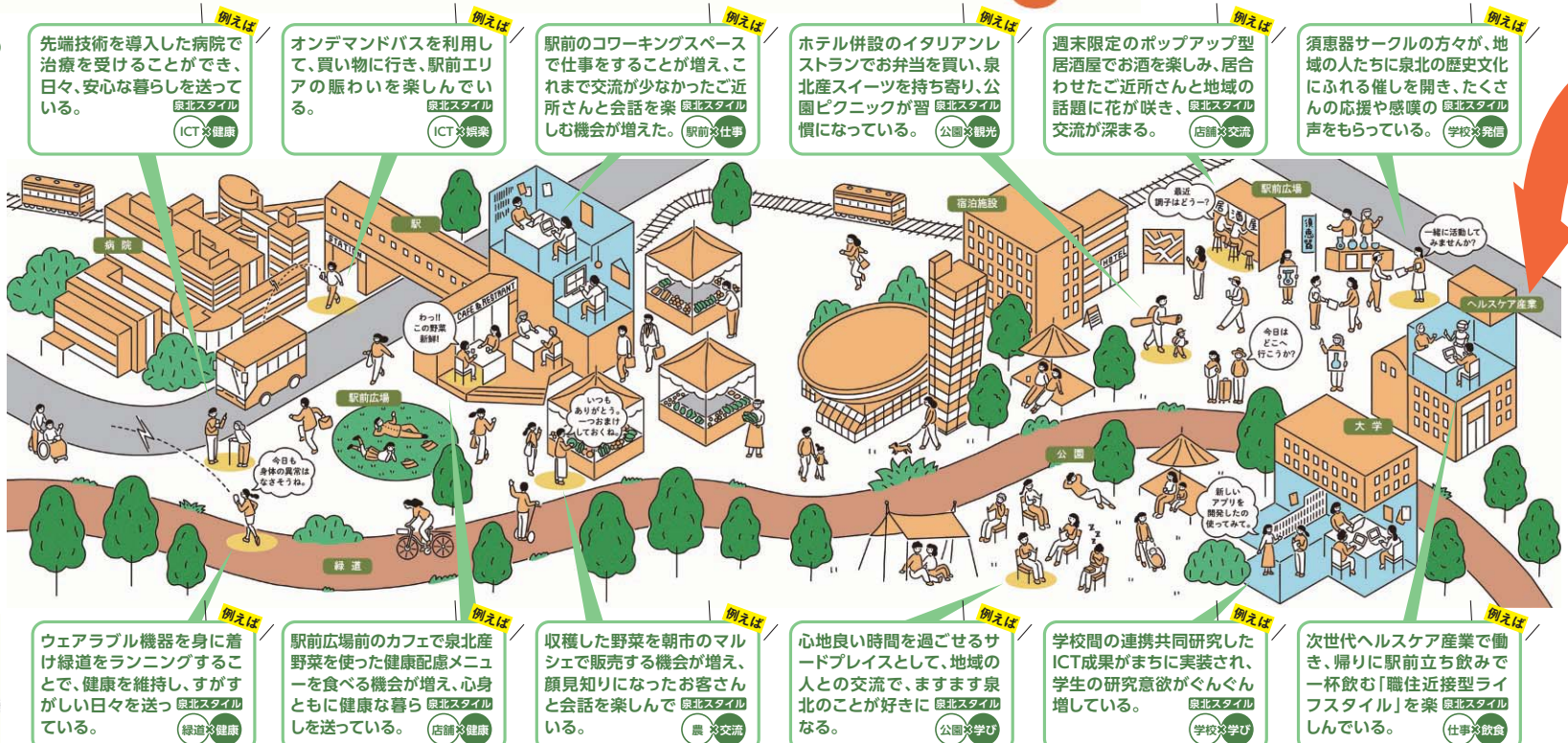
SENBOKU New Design

かつてのベッドタウンから、より豊かに暮らせるまちへ
～泉北ニュータウンの価値を高め、次世代へ引き継ぐ～

今年5月に指針策定！

泉北ニュータウンのこれからの10年間の取り組みの方向性や将来像を示した「SENBOKU New Design(センボク・ニューデザイン)」。住民や事業者の方など、泉北に関わる多様な主体と意思を共有し、更に発展していく魅力的な泉北をめざします。画一的な住宅中心であった「ベッドタウン」は、多様な機能が加わり、多様性を受け入れ、多様な暮らし方が実現できる、「より豊かなまち」へと変革します。そして、持続発展するために生み出された価値を皆で共有し、50年以上の歴史がある泉北ニュータウン地域を次世代に引き継いでいきます。

泉北ニューデザイン推進室 ☎228-7530 FAX228-6824



10年後のまちや人 泉北スタイル



SDGs、健康長寿、スマートシティ、職住一体・近接型ライフスタイルなどの社会情勢や情報通信技術の新しい視点を取り入れる「SENBOKU New Design」は、泉北ニュータウンならではの多様で豊かな暮らし方「泉北スタイル」をめざします。ご紹介したほか多様な取り組み例を示す「SENBOKU New Design」は市ホームページ(2次元コード)のほか、市役所市政情報センター、区役所市政情報コーナー、各図書館でご覧になれます。また、市では泉北ニュータウンの取り組みについて、出前講座を実施しています。申し込みは泉北ニューデザイン推進室へ。

※左図は駅前・周辺エリアのイメージ



コミュニティデザイナー 山崎 亮さん

**住民や事業者など
いろんな主体が思いを共有**
永藤 住民の皆さんや企業・団体

増田 住民活動をするときに、中心となるコアメンバーやクラブメンバーだけでなく、周りのファン層を育てていく仕組みも大切です。山崎 ひとつひとつに価値があると思う付く方もたくさんいます。泉北ニュータウンではそれくらいの関わり方でも良いんだという、潜在的な方々



永藤市長

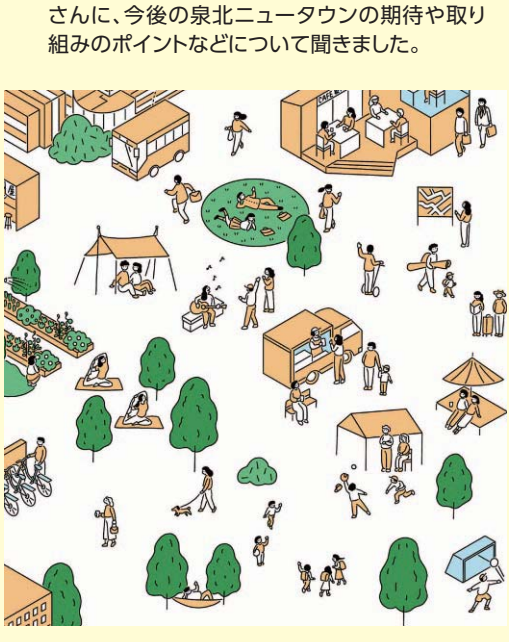
永藤 スマートシティは課題解決の手段であると考えています。泉北ニュータウンは起伏があり、駅から離れた場所もあります。近隣センターでは福祉施設が増えていますが、商店が減り身近な場所が減り、高齢になつた方は移動も難しくなっています。生活圏を維持するためにこれらの課題を解決できる可能性があるのでスマートシティの新しい発想やサービスを取り入れたいと思います。住民も行政も企業の皆さんも力を合わせながら新しくデザインしていくうえで、大きなポイントが2025年の大阪・関西万博だと思っています。これは未来を示す展示会みたいなもので、スマートシティをそれまでに何と形にした

が活動されていることを行政がサポートしながつながら良いですね。山崎 行政の計画では住民の方々と一緒にボランティアやサークルの人たちと何かやりますよというものはよく書かれますが、参加者の母数を増やすという意味では、思いを持っていくという一歩踏み出せない方々、その思いを持ち始めていく方についてサポートすることが重要だと思っています。どうすれば良いだろうと思つているところ、今回の「SENBOKU New Design」を読んでいただく、「あ、これが」みたいなものが結構見つかるんじゃないかと感じます。永藤 活動される方々がいる方、こういう発想があるんだということを知つていただくことが重要です。「SENBOKU New Design」でも、今任んでおられる方や新しく移つて来られる方など泉北ニュータウンでいろいろな方々が関わつて、そこで新しい刺激やヒントを得て化学反応が起きることを期待しています。ぜひそのフィールドを行政が強力にサポートしたいと考えています。

永藤 私たちは今の課題を注視しなくてはなりませんし、これからのビジョンを示して、イメージができるように、「ベッドタウン」から豊かに暮らせるまち(ニュータウン)をコンセプトに掲げました。これまでは、泉北ニュータウンの「再生」を掲げてきたことが、計画に基づいて整備されたまちがあるわけですから、それをどう活かして、どう変えていくかということをも、一度考える必要があります。50年前のまちをそのまま再生するのか、新しい価値観やこれから求められることや希望に合うように変えていくのかについて皆さんと一緒に考えていきたいと思います。New Design」と名前を付けました。

泉北のこれから

コミュニティデザイナー・山崎亮さんを進行役に、永藤市長と大阪府立大学名誉教授・増田昇さんに、今後の泉北ニュータウンの期待や取り組みのポイントなどについて聞きました。



スマートシティやICTの活用
永藤 スマートシティは課題解決の手段であると考えています。泉北ニュータウンは起伏があり、駅から離れた場所もあります。近隣センターでは福祉施設が増えていますが、商店が減り身近な場所が減り、高齢になつた方は移動も難しくなっています。生活圏を維持するためにこれらの課題を解決できる可能性があるのでスマートシティの新しい発想やサービスを取り入れたいと思います。住民も行政も企業の皆さんも力を合わせながら新しくデザインしていくうえで、大きなポイントが2025年の大阪・関西万博だと思っています。これは未来を示す展示会みたいなもので、スマートシティをそれまでに何と形にした

き方の変化でテレワークが進むなど、自分の身近な場所を暮らす時間の大切さを改めて感じることになりました。増田 昭和30年代、国は人口が急増する都市部の住宅難の解決策として、郊外にニュータウンをつくりました。モデルとなったイギリスの田園都市は、食糧供給や働く場も備えた「自給都市」という思想でしたが、日本ではベッドタウン化したことにより、後世に大きな課題を残しました。永藤 諸外国のニュータウンも当初の計画だけでなく、時代に合わせ変わつてきました。泉北ニュータウンもベッドタウン化してしまつたことが一つの課題ですが、そこに住む人たちがいかに充実して過ごせるかを念頭に置き、時代の変化に合わせて、まわりの在り方も変わっていくことが必要とされています。増田 これからのまちづくりは、目標を決めてそれに一直線に向かつていくのではなく、可変性を持たなければなりません。社会情勢が大きく変化するので、可変性を持つて即応

が市民活動にもっと参加しやすくなりそうです。永藤 これからの行政は、住民の皆さんや関わる方々と一緒に創り上げていかないと、住民の皆さんが求めてくるものにならないんじゃないかと考えます。さまざまな役割や立場がありますが、多くの皆さんに共感をいただきながら、「共創」という共に創る大きな方針を実践したいと思っています。

ウイズコロナ時代における泉北ニュータウン
永藤 コロナは、私たちの生活や働き方、価値観を大きく変えました。コロナ禍では外出が制限されたり働

き方の変化でテレワークが進むなど、自分の身近な場所を暮らす時間の大切さを改めて感じることになりました。増田 昭和30年代、国は人口が急増する都市部の住宅難の解決策として、郊外にニュータウンをつくりました。モデルとなったイギリスの田園都市は、食糧供給や働く場も備えた「自給都市」という思想でしたが、日本ではベッドタウン化したことにより、後世に大きな課題を残しました。永藤 諸外国のニュータウンも当初の計画だけでなく、時代に合わせ変わつてきました。泉北ニュータウンもベッドタウン化してしまつたことが一つの課題ですが、そこに住む人たちがいかに充実して過ごせるかを念頭に置き、時代の変化に合わせて、まわりの在り方も変わっていくことが必要とされています。増田 これからのまちづくりは、目標を決めてそれに一直線に向かつていくのではなく、可変性を持たなければなりません。社会情勢が大きく変化するので、可変性を持つて即応

しながら展開できることが大切です。山崎 当初から、計画をつくり突き進んでいくこともありますが、進んできたが、今の泉北ニュータウンは、お住まいの方がいらっしゃるの、まちの将来像を住民の方にも共感してもらえないと次へ移れないですね。永藤 私たちは今の課題を注視しなくてはなりませんし、これからのビジョンを示して、イメージができるように、「ベッドタウン」から豊かに暮らせるまち(ニュータウン)をコンセプトに掲げました。これまでは、泉北ニュータウンの「再生」を掲げてきたことが、計画に基づいて整備されたまちがあるわけですから、それをどう活かして、どう変えていくかということをも、一度考える必要があります。50年前のまちをそのまま再生するのか、新しい価値観やこれから求められることや希望に合うように変えていくのかについて皆さんと一緒に考えていきたいと思います。New Design」と名前を付けました。



大阪府立大学名誉教授 増田 昇さん